

サービス労働・商業労働の価値形成性

——『資本論』の批判的分析——

小檜山 政克

現代の社会では、人間の暮らしを支え、より良くするため、人々がそれぞれどのような持ち場で、どのような仕事をうけもって働いているのだろうか。人々の暮らしには、衣食住をはじめとする沢山の品物が必要であるのはもちろん、働くのに必要な知識を身につけるための教育、健康を維持するための医療等々いろいろなものが、なくてはならない。そしてひとりひとは、このような社会のために必要な仕事のどれか一つをひきうけて、それを自分の職業として、毎日働いているのである。経済学でいう社会的分業がこれである。

社会的分業とは、いいかえると社会的労働配分ということである。つまり、それぞれの時点で社会が必要とする財貨およびサービスが過不足なく供給されるためには、それぞれの部門、職場にそれを生産するための労働力が配置されていなくてはならない（生産のためには、労働力のほかに機械や原料などの生産手段も配分されなければならない。したがって社会的労働配分には過去の労働の成果である生産手段の配分も含まれる）。しかし、資本主義経済ないしその基礎になっている商品貨幣経済（市場経済）では、例えば国家が、社会の需要を計算して、それに応じて強制的に労働力を各部門に配置しているわけではない。そこでは各商品生産者は、主観的には全く自由であって、専ら自分の利益のみを追求する。また、かれらはそうしなければ、必然的に落伍してしまう。ところが、このようなかれらの私利の追求が、自然発生的にその時社会に必要な社会的労働配分をつくり出すのである。このからくりこそが、価値法則の役割なのである。

商品の交換比率はその商品の価値によってきまる、その価値とはその商品を生産するのに必要な労働である、というのが、K. マルクスが『資本論』で論

証している労働価値論の基本的命題であり、これは経済社会を体系的に把握するための基礎になるものである。実際には諸商品は貨幣を通じて交換されており、その場合商品の価値は貨幣で表現されて価格となっている。しかし商品の価格は、その時々の子市場の需給関係に従って変動する。もし需要が供給よりも大きければ、その商品の価格は価値よりも高くなるし、需要が供給よりも少なければ、価格は価値よりも下がる。ひとりひとりの商品生産者は、このような価格の動きを見ていて、価格の上がったものの生産を増やし、下がったものの生産を減らす。このように、価格の価値の上下への変動を通じて商品生産者の生産を調整することによって、いわば自然発生的にその時々の子社会の需要に応じた労働配分を行うのが、まさに価値法則の役割なのである。労働価値論というのは、上述の基本的命題をもとに経済の全分野に展開された理論体系であるが、その根幹となっているのが、このような価値法則の役割、機能なのである。

ところで、価値法則に基づく社会的労働配分、言い換えれば社会的分業編成は、物質的財貨を生産する労働だけを対象にするものなのか、それともサービス労働つまり物財生産以外の労働も含むものなのか、ということは、経済学者の間で意見の分かれるところであろうが、筆者は、既に触れたとおり、それは財貨だけではなく、サービスを生産する労働も含むものと考え。物的商品と同様にサービス商品も価格をもっており、その価格はサービス商品を生産するのに必要な労働——価値を中心にして、需給関係に応じて変動する。人々はそれに応じて各種サービス部門に労働と生産手段を投下する。このようにして、サービス部門の生産も、物財生産部門と同じように、価値法則による社会的労働配分の支配を受けているのである。この事実の承認は、現代経済を価値法則に基づいて説明するための出発点である。もちろん、人々の生活を根本において支えているのは、衣食住を始めとする物財であり、経済発展の基盤となるのは、財貨の生産である。けれども、今日の経済社会において、サービス労働の意義と比重が非常に高まっていることは、恐らく誰も否定できないところであって、現代経済社会をリアルに、体系的に把握するためには、労働価値論そして価値法則をこのように理解することが、どうしても必要になってくるのであ

る。しかしながら、物財生産以外の労働がすべて価値法則の支配に入るかといえば、そうではない。一般的、原理的にいえば、一定の有用効果を生産し、社会的分業の一環として客観的に承認されることが、その条件である。しかし、それぞれの労働について分析して、それがどういう有用効果を生産し、どのような意味で社会的分業の一環としての資格をもつのかを、吟味する必要がある。本稿では以下そのような吟味の第一歩として、商業労働の検討を試みることにしたい。ちなみに、以上で述べたサービス労働一般の問題については、拙稿「現代の産業構成と労働価値論」（『立命館経済学』、第38巻第3号、1989年8月）を参照いただければ、幸いである。

なお、本稿の表題の「サービス労働・商業労働の価値形成性」のなかの「価値形成性」ということばは、マルクスが『資本論』第1巻第5章「労働過程と価値増殖過程」のなかで、「商品そのものが使用価値と価値との統一であるように、商品の生産過程も労働過程と価値形成過程との統一でなければならない」と述べている場合の、「価値形成」のことである。

I 商業労働の価値形成性

ふつうマルクス経済学で商業労働というのは、商品の流通のための労働のことであるが、それは産業資本の循環でいえば、 $G-W < \hat{P}_m \dots P \dots W' - G'$ のなかの $G-W < \hat{P}_m$ と $W' - G'$ のための労働である。それは大きく分けると、品物の輸送、保管それに売買取引の三つになる。しかし私の考えでは、本来の商業労働あるいは一般の人々が考えている商業労働というのは、この第3番目だけである。三つをまとめるなら、流通労働とでもいうべきか。運輸業というのは、独立の生産部門であり、倉庫業というのも、商業と同じではない。それでここでの議論の中心は、この3番目なのであるが、流通ということで、あとの二つについても、検討していくことにする。

これまでマルクス経済学では、通例、『資本論』でのマルクスの規定に従っ

て、このうちの前二つを工場で物を造る生産的労働の延長とみなして、価値を形成するとしてきたが、最後の売買取引にかかわる行為、いわゆる純粹流通活動は、価値の単なる形態変化であって、価値を生み出すものではないと、考えられてきた。しかしながらこの純粹流通活動も、人間の手によって行われる以上、当然労働が支出されているのであり、しかもそれは商品を消費者の手に渡すために、社会的に必要なものであるのだから、この労働も、有用効果という形ではあれ、やはり価値を生産し、また価値法則の支配を受けるのである。この点は、産業資本家が自らそれを行おうとも、また商業資本家が代わって行おうとも、同じことである。どちらにしても、売買活動のために必要な労働が、社会的分業の一環として社会的労働配分の対象となっているのである。本稿では、以上の点を論証するために、まずこのような純粹流通活動にはどのようなものがあるのか、その具体的内容を簡単に調べ、そのあと『資本論』での論理を検討してみることにする。

K. マルクスが『資本論』のなかで、輸送や保管などを除いた純粹の商業活動として当時挙げていたものは、計算、簿記、市場操作や通信、現金出納などであり、そのために必要な不変資本としては、事務所、紙、郵便料金などがあった（邦訳『マルクス＝エンゲルス全集』第25巻、p. 361）。この種の活動にはさらに、商品の品揃え、品質鑑定、秤量、分類、小分け、受渡しなどの仕事もある（橋本勲『商業資本と流通問題』、1970年、p. 83）。このような仕事は、規模こそ拡大したけれども、こんにちでも依然として、商業活動の基本的内容として変わりはない。ただし、こんにちの企業の生産活動のためには、世界各地からの原材料の買入れ、新規学卒者をはじめ各種の能力をもった労働力の雇い入れ、国際的な市場開拓などの諸活動が、飛躍的に増大していることに注意すべきである。同時に、現代では、大資本の市場獲得政策としてのマーケティングが、重要な商業活動になっていることを忘れてはならない。マーケティングでは、大量の広告宣伝、市場戦略立案のための市場情報の蒐集、市場開拓政策などがおこなわれる（橋本勲、上掲書、p. 86）。このようなマーケティング活動のなかには、社会的にみて不必要なものもあろうが、そのような部分を除けば、こ

れも、客観的、社会的に必要なものと考えられる。もちろんこの場合、不必要な部分と必要な部分とを区分することはそれほど簡単ではなく、それ自体大きな検討・吟味作業の対象であるが、ここではとりあえず、例えば消費者に不正確な情報を与えるような広告宣伝などは不必要な部分に含まれるとしておこう。以上見てきたような純粹の商業活動は、商品の輸送や保管と同じように、生産と消費を結び付ける上で社会的になくしてはならない役割を果たしているのであって、既に述べたとおり、その意味で、間違いなく有用効果を生み出しており、したがってまた、社会的分業の一環としての仕事を行っている。そして、そこでの労働は、価値法則にもとづく社会的労働配分に従っているのである。

なお以上の考察は、理論的な観点から純粹の流通活動とみなされる商業労働についてなされたわけであるが、これを実際の社会にあてはめてみると、まず三井物産や三菱商事などのような商社の従業員、三越や高島屋などのようなデパートの従業員の労働は大部分このような商業労働にはいるだろう。しかし、日立とかSONYなど製造会社に勤める人々のなかにも同じ種類の商業労働を行っているサラリーマンがたくさんいることを、忘れてはならない。製造会社のなかで、技術者や工場労働者は別として、営業部、資材部などで働くサラリーマンの大部分は実は、理論的にはこれと全く同じカテゴリーの商業労働をおこなっているのであって、このような人々を含めるならば、商業労働従事者の数は、普通の統計に示されているよりも遙かに膨大なものになるだろうことは、想像に難くはない。これに関連して、いわゆる「製造業でのサービス経済化の度合い」を、直接部門労働者と間接部門労働者の対比である直間比率で捉えようとする試みがある（例えば鶴田俊正編『成熟社会のサービス産業』、1982年、有斐閣、p. 233）。しかしその場合には間接部門つまりサービス部門に、販売などのほかに研究部門も含めているので、このような試みは不正確なものとならざるをえない。財貨生産のための技術研究は商業労働ないしサービス労働とは言えないからである。

ちなみに、現在ペレストロイカの必要性に直面しているソ連経済が、これまで商業労働は財貨も価値も生産しないものとして、これを極端に軽視してきた

ことが、結局は今日の貧弱な経済状況の一因になっていることを想起することは、無駄ではないだろう。輸送、保管、売買取引を含めた商業活動あるいは財貨の流通のための労働は、社会全体の経済の円滑な発展のために極めて重要な役割を果たしているのである。

Ⅱ 『資本論』第1巻の商品流通と価値形成の関係の叙述について

資本主義経済を、最も本質的、全面的、体系的に解明したのは、カール・マルクスの『資本論』であることは、疑いのないところである。ところが、この『資本論』のなかで、マルクスは、商業労働、より正確にはそのなかの売買取引にかかわる流通活動のための労働は、価値をつくりださないとみなしている。私は、このような労働も価値を生み出すとみなすべきであると考えている。それで、このような考えを主張するためには、マルクスの論理をくわしく吟味し、それに必要な批判を加えることが、不可欠となるだろう。

まず『資本論』の第1巻でのマルクスの論理の批判からはじめよう。

『資本論』の第1巻、第2編、第4章「貨幣の資本への転化」の第2節「一般的定式の矛盾」のなかで、マルクスは $G-W-G'$ という資本の流通からは価値は生まれないと主張して、次節の労働力の売買の問題に移っていくのであるが、しかし、この主張は単に次節へのいわば枕として、便宜的に述べられているのでは、けっしてない。この主張は、『資本論』全3巻を通じて、商業労働は価値を生まないとする彼の論理の基礎となっているものである。本稿での以下の引用はすべて、大月書店版邦訳『マルクス＝エンゲルス全集』第23、24、25巻による。ページも同書のものである。

p. 206. 「抽象的に考察すれば、すなわち、単純な商品流通の内在的な諸法則からは出てこない諸事情を無視すれば、ある使用価値が他のある使用価値と取替えられるということのほか、単純な商品流通のなかで行われるのは、商品の変態、単なる形態変換のほかにはなにもない〔商品―貨幣

一商品という形態変換のこと〕。……この形態変換は少しも価値量の変化を含んではいない。……その純粋な姿では、商品交換は等価物どうしの交換であり、したがって、価値をふやす手段ではないのである。」（下線は引用者のもの。〔 〕内は引用者の注。以下同じ）

「抽象的に考察すれば、すなわち、単純な商品流通の内在的な諸法則からは出てこない諸事情を無視すれば」とされているわけであるが、それでは抽象的ではなく、具体的に考察した場合にはなにが出てくるのだろうか。マルクスの文章をくわしく調べてみると、それはひとつは、「単純な商品流通」ではない「発達した商品流通すなわち商業」（p. 191）、もうひとつは、「単純な商品流通」ではない「資本としての貨幣流通」（p. 198）であろう。それはつまり一言でいえば、商業資本ということになる。しかしながら、実はマルクスは、のちに明らかになるように、より具体的な分析の段階に進んでも、「単純な商品流通」の抽象段階の上の命題をぜんぜん変えていない。たとえば、『資本論』第2巻の文章を先取りして示せば次のとおり。

p. 152. 「流通部面のなかでは資本は商品資本および貨幣資本として住んでいる。資本の二つの流過程というのは、商品形態から貨幣形態に転化すること、貨幣形態から商品形態に転化することである。商品の貨幣への転化が、ここでは同時に、商品に合体されている剰余価値の実現でもあるという事情、また、貨幣の資本への転化が、同時に、資本価値の自分の生産要素の姿への転化または再転化でもあるという事情は、これらの過程が流過程としては単純な商品変態の過程であるということ、すこしも変えないのである。」

したがって、第1巻におけるマルクスの留保、あるいは将来におけるより具体化、つまりもっと具体的な条件を入れた場合のより展開された分析の約束は、ついにはたされなかったといえ、言い過ぎかもしれないが、やはり疑問がこる。

なお、上述の p. 206 の引用文で言われている、純粋な姿での、等価物どうしの交換としての商品交換、つまり、ごまかしのない等価交換ということは、

理論的考察の前提として、当然、承認すべきであろう。

Ⅲ 『資本論』第2巻の商業労働の価値非形成説に対する批判

それでは、『資本論』第2巻の検討に移ろう。ここでは「資本の流過程」が分析されているわけであるが、その第1編「資本の諸変態とその循環」のなかで、商品ないし資本の流通の問題が取り扱われている。

(1) 第5章「流通期間」のなかの文章について

次の引用文では、たしかにもっと具体的な事態が検討の対象に入ってきているが、しかしその理論的な取扱いには、なんの発展もない。

p. 155. 「場合によっては、生産手段が市場にみあたらずに、これから生産されなければならないとか、遠方の市場からとりよせる必要があるとか、その平常どおりの供給がおこなわれないとか、価格の変動などが起きるとか、要するに、単純な形態変換 $G-W$ では知られないような、しかし流通段階のこの部分のために多かれ少なかれ時間を必要とさせるような、多くの事情がある。 $W-G$ と $G-W$ とは、時間的に分離されていることがありうるように、場所的にも分離されていることがありうる。」

それで、「商品生産では、流通は生産そのものと同様に必要であり、したがって、流通担当者も生産担当者と同様に必要である。」としながらも、マルクスは、やはり「流通担当者は生産担当者から支払いを受けなければならない。しかし、互いに売買し合う資本家たちが、この売買行為によっては生産物も価値もつくりださないとすれば、このことは、彼らの事業の規模がこの機能の他人への転嫁を可能にし必要にする場合にも、変わらないのである。」とこの文章に続けているのだが、なぜそうなのか。

ここにマルクスの混同があるのではないか。流通担当者が輸送、保管と取引行為を果たせば、これは生産物に価値を付け加えることになるのではないか。

その場合、輸送、保管は、マルクスが後で述べているように、ともかく価値を付け加えるとされるが、問題は売買取引である。売買取引を、紙の上の契約成立そのものとみるならば、それは価値を生むことはないだろう。しかし契約成立のためには、たくさんの準備作業が必要であり、そのためには多くの労働が投入されるし、また契約実行のためにも多くの労働が必要である。だから、売買取引成立のための準備作業と、法的な意味での（あるいは観念的に考察された）取引そのものとを区別して、取引そのものは価値を生まないが、準備作業のための労働は価値を生むと規定した方が正確ではないか。これは産業資本家のもとの流通担当者がおこなおうと、商業資本家がおこなおうと、本質は変わりはない。マルクスは第1巻での抽象次元を、この点では、そのまま持ち込んでしまっているのではないか。

(2) 同編第6章「流通費」の第1節「純粋な流通費」のなかの文章

取引を準備し成立させるための労働の必要性をマルクスはたしかにみとめて
いる。しかしその価値形成性を認めようとしない。つぎのとおり。

p. 159. 「ところで変態 $W-G$ と $G-W$ は、買い手と売手とのあいだで行われる取引である。このような取引がまとまるためには時間が必要である。ことに、ここでは、互いに相手よりもたくさんもうけようとする戦いが行われるのであって、事業家たちは、“ギリシア人どうしが出会えば激闘が始まる”と言われるように、互いに対立しているので、ますますそうである。状態の変化 [同じ価値の $W-G-W$ という変化のこと] には時間と労働力が必要であるが、しかし、価値をつくりだすために必要なのではなく、一方の形態から他方の形態への価値の転換を引き起こすために必要なのであって、このことは、互いにこの機会に乗じて余分な価値量を取
得しようとする試みがなされても、少しも変わらないのである。この労働が双方のわるい意図のために増大したとしても、それが価値をつくりだすものではないことは、訴訟事件のために労働がなされてもそれは係争の目的物の価値量をふやすものではないのと同じである。この労働——それは

全体としての資本主義的生産過程の一つの必然的な契機であって、この全体性のなかでは生産過程は流通をも含んでいるか、または流通のなかに含まれているのであるが——は、熱を起こすために用いられる材料の燃焼労働のようなものである。」

ここでの燃焼労働の比喩は、ひじょうに面白い。つまり、たとえば、石炭を燃料として消費するためには、燃焼労働が必要であるが、この燃焼労働にはエネルギーが支出される。しかし、そのエネルギーは、熱に転化するのではなくて、熱から出ていくのだというのである。これは、あとで出てくる社会的空費という思想とかかわっている。

現実の世界をみると、たとえば、 $G-W-G'$ の $G-W$ で、鉄鋼資本家は世界中から鉄鉱石と石炭を買い集める、良いものを安く。そうしなければ、彼は、価値をつくり出すことはできない。いかにもそこでは、資本家の貨幣が原料に形態転化をしたわけではあるが、マルクスが指摘しているように、これは再生産過程の不可欠の契機である。

注目すべきことは、161ページの注で、ケネー『経済表』から肯定的に次の引用をしていることで、これは極めて象徴的。

「商業上の費用は、必要ではあるが、負担になる支出とみなさなければならぬ。」

重農主義者は農業だけが価値を生むと考えていた。経済の発展とともに経済学が価値を生む領域として認識する範囲がしだいに広がっていくのは、歴史の必然であろう。

商業労働つまり売買取引のために投じられた労働は、社会的分業の一環としてのひとつの機能である。しかしこの労働は、生産物をつくらないから、社会的空費になると、マルクスは考える。

p. 161. 「事柄を簡単にするために、この売買担当者は自分の労働を売る人だと仮定しよう。彼は自分の労働力と労働時間とをこの $W-G$ と $G-W$ という仕事に支出する。だから、彼は、この仕事によって生きて行くのであって、それは、他の人がたとえば紡績や丸薬製造によって生きて行

くのおなじことである。彼も一つの必要な機能を行う。なぜならば、再生産過程そのものが不生産的な諸機能を含んでいるからである。彼もほかのひとと同じに労働するのであるが、彼の労働の内容は価値も生産物もつくりださないのである。彼自身が生産上の空費に属するのである。」

再生産過程そのものが不生産的な機能を含んでいる、というマルクスの考え方に注意。たしかに売買行為そのものをわれわれは食べたり、着たりするわけにはいかない。しかし、それがなければ経済は動かない。売買行為は再生産過程に不可欠である。だが、それは使用価値つまり物財をつくらないから、不生産的な機能であり、空費であるというのが、ここでのマルクスの含意であろうか。

次の二つの引用文から明らかなのは、マルクスが、価値の形態転換——そのための純粋流通費——つまりは本来の商業労働は、商品生産というひとつの経済システムから生ずるのだと、みなしていたことを、示している。

p. 165. 「……一方の簿記に伴う費用または労働時間の不生産的な支出と、他方の単なる売買期間の費用とのあいだには、いくらかの違いがあらわれる。後者は、ただ、生産過程の一定の社会的形態から、すなわちそれが商品の生産過程だということから、生ずるだけである。〔そうではなからう。社会主義社会でもこのような純粋の流通活動は極めて重要〕。簿記は、過程の調整や観念的な総括としては、過程が社会的な規模で行われて純粋に個人的な性格を失ってくればくるほど、ますます必要になる。」

p. 165. 「ここで問題にするのは、ただ、単なる形態的な変態から生ずる流通費の一般的な性格だけである。そのあらゆる細かい形態に立ち入ることは、ここではよけいである。しかし、価値の純粋な形態転化に属しておりしたがって生産過程の一定の社会的形態から生ずる諸形態、そして個別の商品生産者にとってただ一時的なほとんど目につかない契機であって彼の生産的諸機能に付随するか、またはこれとからみ合っている諸形態——このような諸形態が巨額な流通費として人目を驚かすことになりうるということは、単なる貨幣収支が銀行などや個別事業の会計係の専有機能として独立化され大規模に集中されているのを見れば、わかる。忘れては

ならないのは、このような流通費はその姿が変わることによってその性格を変えるものではないということである。」

さらに、ここにはいくつかの重要な問題点がある。まずマルクスは簿記と売買行為とを区別していること。第二に、これは繰り返しになるが、純粋流通活動を商品生産とだけ結びつけていること。これは事実と反する。第三に、「単なる形態的な変態から生ずる流通費」——つまり純粋流通費にはもっといろいろある、といていること。第四に、「巨額な流通費」ということをマルクスは充分知っていながら、それでもそれが価値を生まないとしていることである。

マルクスは、第1節「純粋な流通費」の最後の項目に貨幣をとりあげて、次のように言っている。

p. 167. 「金銀は、貨幣商品としては、社会にとって、ただ生産の社会的形態から生ずるにすぎない流通費をなしている。それは商品生産一般の空費であって……」

このように、貨幣を純粋流通費としているが、これは、商品の形態変化のためのものは、すべて価値を生まないとするマルクスの思想と関連がある。

貨幣を空費とする考えも、商業労働は価値を生まないとする考えも根は同じ。商品生産という社会的形態だけに必要であるにすぎないものは、価値は生まないとするもの。しかし、現在考えられる限りでの社会主義社会でも貨幣は必要だし、純粋流通活動は必要である。

(3) 同編第6章第2節「保管費」のなかの叙述について

p. 167. 「価値の単なる形態変換から、すなわち観念的に考察した流通から生ずる流通費は、商品の価値にははまらない。」

この節冒頭のこの文章は、最大級に重要だ。ideell betrachtet とはなにを意味するか。紙の上の取引のためにも費用がかかるが、それは価値には入らないという。そして、ここでは、価値を生まないとはいわず、商品の価値には入らないといている。

p. 167. 同じパラグラフ「われわれがこれから考察する流通費は、これと

は性質の違うものである。この流通費は生産過程から生じうるものであって、ただこの生産過程が流通のなかでのみ続行され、したがってその生産的な性格が流通形態によっておおい隠されているだけである。他面では、それは、社会的に見れば、単なる費用であり、生きている労働なり対象化されている労働なりの不生産的な支出だと言えるのであるが、しかし、まさにそうであることによって、個別資本家にとっては価値形成的に作用することができ、彼の商品の販売価格への付加分をなすことができるのである。」

ここでも大問題がひしめいている。

第一。「生産過程から生じうる流通費」、「生産過程が流通のなかでのみ続行されるもの」、「その生産的な性格が流通形態によっておおい隠されているもの」という規定。これは後で具体的なもののところで点検するが、保管、運輸費用のことであろう。要するに、使用価値を消費者のところまで、運ぶ費用。

第二。「社会的に見れば、単なる費用であり、生きている労働なり対象化されている労働なりの不生産的な支出だと言えるもの」なのに「個別資本家にとっては価値形成的に作用することができ、彼の商品の販売価格への付加分をなすことができるもの」というのはなにか。直接的生産過程で使用価値と価値を生産するために投下された労働ではないので、使用価値も価値も生産していないが、直接的生産過程で生産された価値を流通部面の資本家にまわす根拠となるような労働ないし資本支出のことであろう。

第一の問題ではなにかが「生産的」なのかが、はっきりさせられなければならない。

第二の問題では、社会的価値と個別的価値、価値生産と価値形成の相違について、明確にしなければならない。社会的価値は生産されるが、個別的価値は形成されるのだ。あるいは、新しく生産されたのではない価値が、商品の価値のなかに入るのだと、マルクスがみなしていたと、言ってもよい。なお、ここでの「価値形成」ということばは、本稿のサブタイトルのなかの「価値形成」とは、同じ表現でも内容は違うものである。

これら二つの問題を解く鍵は次のマルクスの文章のなかにある。

p. 168. 「商品に使用価値をつけ加えることなしに商品の価格を高くする費用〔保管費などをさす〕、したがって社会にとっては生産の空費に属する諸費用が、個別資本家にとっては致富の源泉になることができるのである。」

つまり、商品に使用価値をつけ加えることが生産的で、社会的価値を生産するものであり、商品に使用価値をつけ加えることなしに投下された労働は、個別資本家にとって価値を形成するのだ。

この場合、価値形成というのは、直接的生産過程でつくられた価値をもってくすることを意味している。

次の文章には、商業労働に関するマルクスの思想が、よく表れている。

p. 170. 「ところで、商品在庫の形成によって必要になる流通費が、ただ既存の価値が商品形態から貨幣形態に転化するための時間からのみ、つまりただ生産過程の一定の社会的形態からのみ（ただ、生産物が商品として生産され、したがってまた貨幣への転化を経なければならないということからのみ）生ずるかぎりでは——それは第一節に挙げた流通費とまったく共通な性格をもつものである。他方、諸商品の価値がここで保存または増殖されるのは、ただ、使用価値すなわち生産物そのものが資本投下の必要な一定の对象的諸条件のもとに移され、また使用価値に追加労働を作用させる諸作業のもとに置かれるからにほかならない。これに反して、商品価値の計算やこの過程に関する簿記や売買取引は、商品価値が宿っている使用価値には作用しない。それらは、ただ商品価値の形態と関係があるだけである。それゆえ、前提された場合には在庫形成（それはここでは自発的でないものである）に伴うこれらの空費はただ形態転化の停滞と必要とから生ずるだけなのに、それにもかかわらず、それらが第一節の空費と区別されるのは、それらの対象そのものが価値の形態転化ではなく価値の維持だということによるのであって、この価値は生産物すなわち使用価値としての商品のなかに存在し、したがってただ生産物すなわち使用価値そのものの維持によ

てのみ維持されることができるのである。使用価値はここで高められもふやされもせず、かえってそれは減少する。しかしその減少は制限されて、使用価値は維持されるのである。前貸しされて商品のなかに存在する価値も、ここでは高められない。しかし、新たな労働が、対象化されている労働も生きている労働も、付け加えられるのである。」

この文章が扱っている例は、商品経済であるがゆえに起こるとされる滞貨の手当て、つまり品質維持などのために投下された労働のことであるが、それだけに問題を際立たせている。

ここに表れているマルクスの商業労働の価値非形成性に関する思想は、集約して言えば次のようになるだろう。

すなわち、価値の形態変化は商品生産社会にのみ存在するものであり、そのための労働は価値をつくりださない。ただし、同じ社会的空費であっても、使用価値に作用を及ぼすものは、個別的価値をつくりだす。形態転化の停滞と必要から生ずる商品保管費は、それが使用価値つまり生産物の維持にかかわるかぎりでは、同じ社会的空費であっても、個別的価値は形成するというのである。この場合、社会的空費あるいはその逆の社会的価値というのは、商品生産社会以外の諸社会にも共通する基準ないし価値のことであり、個別的価値というのは、商品生産社会にのみ通用する価値と考えるべきであろう。そして、資本主義社会も商品生産社会の一種なのだから、資本主義社会の価値は個別的価値でよいことになる。

いいかえると、マルクスがなぜ商業労働は価値を生まないと考えたのかといえば、第一義的には、それは商品生産社会にのみ（つまり価値の形態変化にのみ）必要なものであると考えたこと、さらにはまた、それが物財——使用価値をつくりださないことにこだわったためであろう。微妙なのは、この第二点に関して、マルクスが、使用価値をつくりださなくても、生産された使用価値に作用を及ぼすならば（滞貨商品の品質維持）、その労働は個別的価値は形成するとみなしたことである。思うに、マルクスは、社会主義社会になれば、計画経済当局が、商業や貨幣の媒介なしに、生産物を生産者から消費者に渡すものと考え

ていたのだろう。しかし、商業というのは、売手と買手を結び付ける機能、社会的にみれば、需要と供給を結び付ける機能をはたすもので、それは高度に発達した社会的分業をもつ社会では、きわめて重要なものであって、そのための労働ないし費用は、けっして社会的空費などにはならないものと、考えるのが妥当ではなかろうか。物財——使用価値とのかかわりについては、価値とはなにか、という大問題とむすびつくが、私は、すでに述べたとおり、それは物財を生産するか否かにかかわらず、一定の有用効果をつくりだし、かつ社会的分業の一環として認められた労働の支出である、と考えるものである。

次の文も大切。ここでは、特別な滞貨の場合ではなく、一般的な生産物在庫のための保管費用が問題になっている。

p. 177. 「生産物在庫の社会的形態がどうであろうと、その保管には費用が必要である。……これらの費用はつねに、対象化された形態か生きている形態かでの社会的労働——したがって資本主義的形態では資本投下——、といっても生産物形成そのものには加わらないその一部分をなしており、したがって生産物からの控除をなしている。それは必要であり、社会的な富の空費である。それは社会的生産物の維持費であって、このことは、商品在庫の要素としての社会的生産物の存在が単に生産の社会的形態から、すなわち商品形態やその必然的な形態変化から生ずるのであろうと、またはわれわれが商品在庫をたんに生産物在庫の一つの特殊な形態、すなわちたとえ流通過程に属する生産物在庫形態としての商品在庫という形態はとらなくてもあらゆる社会に共通な生産物在庫の一つの特殊な形態とみるのであろうと、どちらにしても変わりはないのである。」

つまりここでマルクスは、1. 保管費はあらゆる社会にとって必要なものであること（「社会的生産物の維持費」）、2. それは「生産物からの控除」、「社会的な富の空費」であることを、主張している。

つぎにマルクスは保管費がどの程度まで商品の価値に入るかを検討する。

p. 180. 「商品在庫が商品流通の条件であり、しかも商品流通のなかで必然的に発生した形態でさえもあるかぎり、つまり、ちょうど、貨幣準備

の形成が貨幣流通の条件であるように、この外観上の停滞が流動そのものの形態であるかぎりでは——ただそのかぎりでのみこの停滞は正常なのである。」

p. 182. 「在庫形成の費用は、(1)生産物量の量的減少（たとえば穀粉在庫の場合）、(2)品質の損傷、(3)在庫の維持に必要な対象化されている労働と生きている労働とからなっている。」

以上の引用文から明らかなことは、正常な在庫商品にたいする保管費だけが価値を形成するということである。

(4) 第6章第3節運輸費の問題

つぎに運輸の問題に移ろう。実は、マルクスの時代でも、今日でも、運輸業というのは、商業とはちがって、ひとつの独立の生産部門となっている。それを、ここ、商業にかかわる議論のなかで扱うのは、それが流通と関連しているからである。マルクスのつぎの文章は簡潔にこの間の事情をあらわしている。

p. 186. 「運輸業は一面では一つの独立な生産部門をなしており、したがってまた生産資本の一つの特殊な投下部面をなしている。他面では、それは、流通過程のなかでの、そして流通過程のための、生産過程の継続として現れるということによって、区別される。」

この文章から明らかなように、運輸業に投下される資本は、生産資本であって、商業資本ではない。そして、そこでは価値が生産される。

p. 183. 「物の使用価値はただその消費によってのみ実現されるものであって、その消費のためには物の場所の変換、したがって運輸業の追加的生産過程が必要になることもありうる。だから、運輸業に投ぜられた生産資本は、一部は運輸手段からの価値移転によって、一部は運輸労働による価値付加によって、輸送される生産物に価値をつけ加えるのである。このような運輸労働による価値付加は、すべての資本主義的生産でそうであるように、労賃の補填と剰余労働とに分かれるのである。」

ただし、運輸業で生産されるのは、有用効果であって、物財ではない。そして

マルクスはこの有用効果を価値論的には物財と区別せず、同様に扱っている。以下、『資本論』の第2巻第1章第4節にさかのぼって、その運輸業に関する叙述から、有用効果についての説明をピックアップしておく。

p. 69. 「ところで、運輸業が売るのは、場所を変えること自体である。生みだされる有用効果は、運輸過程すなわち運輸業の生産過程と不可分に結びつけられている。……その有用効果は、生産過程と同時にしか消費されえない。それは、この過程とは別な使用物として存在するのではない。すなわち、生産されてからはじめて取引物品として機能し商品として流通するような使用物として存在するのではない。しかし、この有用効果の交換価値は、他のどの商品の交換価値とも同じに、その有用効果のために消費された生産要素（労働力と生産手段）の価値・プラス・運輸業に従事する労働者の剰余労働が作りだした剰余価値によって規定されている。この有用効果は、その消費についても、他の商品とまったく同じである。それが個人的に消費されれば、その価値は消費と同時になくなってしまふ。それが生産的に消費されて、それ自身が輸送中の商品の一つの生産段階であるならば、その価値は追加価値としてその商品そのものに移される。だから運輸業についての定式は、 $G - W < \overset{\Delta}{P}_m \dots P - G'$ となるであろう。なぜならば、ここでは生産過程から分離されうる生産物がではなく、生産過程そのものが代価を支払われ消費されるのだからである。」

要するに、マルクスは運輸業が生み出す有用効果というものについて、次のように述べているのである。

- ① 有用効果は、運輸業の生産過程とは別の使用物としては存在しない。
- ② 有用効果の交換価値つまりは価値の規定は、他の普通の商品の場合と同じ。
- ③ この場合の定式の右端は、「 $\dots P - W' - G'$ 」ではなくて、「 $\dots P - G'$ 」になる。つまり W' がなくなる。

これは、有用効果というものについての一般的規定として、運輸業以外のどの部門についてもあてはまると、考えられる。

以上『資本論』第1, 2巻で述べられているマルクスの考えにたいしては、次のように批判すべきである。第一。価値の形態変換 $W—G$, $G—W$ は、（投機師達の転売など所有権の移転のみなどの場合をのぞき）その奥の実体として商品の供給者から需要者への移転がある。すなわち、それを売りたい者から買いたい者への移転が行われたのであって、それを媒介した労働によってそこに有用効果が生まれ、その意味で商品の使用価値が増えているのである。そしてこの媒介のための労働は価値をつくり出している。第二。このような品物の供給者から需要者への移転を媒介する仕事は、商品生産社会だけではなく、社会的分業の発達しているあらゆる社会にとって、共通に必要な欠くべからざるものであり、そのための労働は社会的分業の一環として、当然価値はつくり出すものである（なおここで移転といったのは、輸送など具体的な移動をいっているのではない）。

実はこの問題は、マルクス経済学の根幹——商品生産労働の二重性、あるいは労働過程と価値形成・増殖過程の二面的把握、もともとは商品の価値と使用価値の把握を、商業労働の場合いかに適用すべきかという問題にかかわっている。使用価値を、物そのものにだけかかわらせるのではなく、社会的必要性から出てくる有用効果にまで拡張することが、現代経済学に魂をふきこむことになる。

Ⅳ 『資本論』第3巻の商業労働論の批判

商業労働の価値形成性の問題と言う本稿の課題からすると、『資本論』第3巻のなかでは、第4編「商品資本および貨幣資本の商品取引資本および貨幣取引資本への転化（商人資本）」のなかの叙述に注目しなければならないだろう。

1

まず第3巻第4編第16章の次の注38は重要である。この文章は、商業資本に対するマルクスの思想を、端的に示している。

p. 349. 「……S. P. ニューマンは、彼の『経済学綱要』（アンドーヴァーおよびニューヨーク、1835年）のなかで次のようにいっている。“社会の現在の経済制度のもとでは、商人が行う仕事、すなわち、生産者と消費者とのあいだに立って前者に資本を前貸してそのかわりに生産物を受取り、次にこの生産物を後者に渡してそのかわりに資本をとりもどすという仕事は、それ自体、共同体の経済的過程を容易にする取引であるとともに、それによって取り扱われる生産物に価値を付け加える取引である。”（174ページ）。こうして生産者も消費者も商人の介入によって貨幣や時間を節約する。このような役立ちには資本と労働との前貸しが必要であって、報酬が与えられなければならない。“なぜならば、それは生産物に価値を付け加えるからであるが、それというのも、同じ生産物でも消費者の手があれば生産者の手にあるよりも値打ちが大きいからである”。このように、彼にとっては、商業はちょうどセー氏にとってそうであるように、“厳密には一つの生産行為”（175ページ）として現れるのである。ニューマンのこの見解は根本的にまちがっている。商品の使用価値は、生産者の手にあるよりも消費者の手にあるほうが大きい。というのは、およそ使用価値は消費者の手のなかではじめて実現されるのだからである。じっさい、商品の使用価値は、その商品が消費の部面にはいったときにはじめて実現され、機能するようになるのである。生産者の手のなかでは、使用価値はただ潜勢的な形で存在しているだけである。しかし、人々は一つの商品に二度支払うのではない。すなわち、まずその交換価値に支払い、次にはまたその使用価値に特別に支払うのではない。私はその交換価値に支払い、そのかわりに私

はその使用価値を自分のものにするのである。そして、商品が生産者または中間商人の手から消費者の手に移ることによっては、交換価値は少しもふやされはしないのである。」

そしてこの注に続く本文のパラグラフでマルクスは次のように言う。

p. 350. 「流通過程は総生産過程の一段階である。しかし、流通過程では価値は、したがってまた剰余価値も、生産されはしない。ただ同じ価値量の形態変化が行われるだけである。じっさい、商品の変態のほかにはなんも行われないのであり、この変態そのものは価値創造や価値変化とはなんの関係もないのである。」

以上二つの引用文のなかのマルクスの見解にたいしては、次のように批判すべきである。

すなわち「商品が生産者または中間商人の手から消費者の手に移ることによっては、交換価値は少しもやされはしないのである」かもしれないが、「商品が移る」ということは、一定の有用性、つまり買手にとっては欲しいものをみつけたこと、売手としてはそれを売って貨幣を入手したことであり、商品そのものの交換価値は増えないにしても、ここで一定の有用効果が発生しており、かつ、そのために、すなわち売買の実現のために、一定の労働つまり純粹流通活動のための労働が、疑いもなく支出されていて、買手は、商品そのものの生産のなかでつくり出された当初の使用価値プラス流通で生じた使用価値を自分のものにするために、この二つの部分にたいして支出された労働（価値）にたいして支払うのである。

2

つぎに、第17章「商業利潤」のなかで、マルクスが商業資本の役割について述べている以下の文章は、注目しなければならない。

すなわち、かれは、商業資本は価値も剰余価値も創造しないが、社会的物質代謝の媒介をするものだと、その役割を規定している。

p. 352. 「こういうわけで、商品取引資本——それと結びついていることがある保管や発送や運輸や仕分けや小売のようなすべての異質的な機能を取り去って売るための買いというその本来の機能に限定してみたそれは、価値も剰余価値も創造しないのであり、ただ、価値と剰余価値との実現を媒介し、また同時に諸商品の現実の交換、ある人の手から他の人の手への商品の移行、社会的物質代謝を媒介するだけである。」

しかし、「価値と剰余価値の実現の媒介」、「諸商品の現実の交換、ある人の手から他の人の手への商品の移行、社会的物質代謝の媒介」という機能は、それじしん社会的に必要なものであり、有用効果をもち、価値をつくり出すとみなさなければならない。そしてまたもう一つここで、マルクスが、「仕分け」や「小売」を、輸送や保管と同じカテゴリーに入れていることに、注意しなければならない。つまり、これは価値をつくり出す、いわば生産過程の延長であるカテゴリーであると、マルクスがみているのである。この見方を発展させれば、マルクスのいう「観念的に考察された流通」は、価値を生まないが、そのための現実の労働は価値を生むということになるのではないか。

つぎに、同じ17章での純粹流通費についてのマルクスの規定を、みてみよう。

p. 361. 「純粹に商業的な流通費（したがって発送や運輸や保管などの費用を除いて）は、商品の価値を実現するために、この価値を商品から貨幣へであろうと貨幣から商品へであろうと転化させるために、商品の交換を媒介するために、必要な費用に帰着する。……われわれが、ここで考察する費用は、買うことの費用であり、売ることの費用である。すでに前にも述べたように、このような費用は計算や簿記や市場操作や通信などに帰着する。そのために必要な不変資本は、事務所や紙や郵便料金などから成っている。その他の費用は、商業賃金労働者の充用に前貸しされる可変資本に帰着する（発送費や運輸費や関税前払いなどは、一部は、商人が商品を買入れるときにそれを前貸しするものと見ることができ、したがって購買価格にはいるものと見る

ことができる)。

これらいっさいの費用は、商品の使用価値の生産に費やされるのではなく、商品の価値の実現につやされるのである。それは純粋な流通費である。それは直接的生産過程にははいるないが、流通過程にはいるのであり、したがって再生産の総過程にはいるのである。……

(そのほかにも次の事が研究されなければならないであろう。第一に、ただ必要な労働だけが商品の価値にはいるという法則は流通過程ではどのようにして貫かれるか。……)

これらの費用は、商品としての生産物の経済的形態から生ずる。」

ここには重要な論点が沢山ある。

- (1) 純粋流通費の規定：商品価値の実現，商品交換の媒介のための費用
- (2) 純粋流通費は使用価値の生産ではなく，価値の実現のためのもの
- (3) 純粋流通費は商品経済のもの
- (4) 流通過程の必要労働の問題

この4点のうち、(1)はマルクスの規定をそのまま受け入れられよう。しかし、(2)は、流通で生じた有用効果の生産が考えられ、(3)は、商品経済以外の経済でも、社会的分業が発達している社会では不可欠のものと、見なされるべきである。

この(3)については、さらにつぎの点が強調されなければならない。

第一。価値をつくり出すかいなかが我々の問題なのであるが、価値とはそもそも商品の価値なのだから、商品経済以外の社会で価値があるのかどうか、価値というものは、そもそもそこではなくなってしまわないか、という疑問が当然起こるだろう。これについては、『資本論』全3巻の終りに近い部分での次のマルクスの指摘がきわめて重要である。

「……[第二に] 資本主義的生産様式が解消した後にも、社会的生産が保持されるかぎり、価値規定は、労働時間の規制やいろいろな生産群のあいだへの社会的労働の配分、最後にそれに関する簿記が以前よりもいっそう重要になるという意味では、やはり有力に作用するのである。」(『資本論』

第3巻49章末尾，全集 p. 1090)

「…… Zweitens bleibt, nach Aufhebung der kapitalistischen Produktionsweise, aber mit Beibehaltung gesellschaftlicher Produktion, die Wertbestimmung vorherrschend in dem Sinn, daß die Regelung der Arbeitszeit und die Verteilung der gesellschaftlichen Arbeit unter die verschiedenen Produktionsgruppen, endlich die Buchführung hierüber, wesentlicher denn je wird」(Marx Engels Werke, 25, s. 859.)

つまり，社会的労働配分にかかわっては，価値というものは，社会的分業が存在するかぎり，どの社会でも必要だということである。本稿が主張する価値というのは，どの社会についても，なによりもこの意味での価値である。

第二。このマルクスの引用に出てくる「簿記」のように，社会主義社会では，交換の媒介の仕事は，あるいは計画機関が遂行するとマルクスは考えていたのかもしれないが，その場合にはこの機関の人々が行う労働の（これは重要なもの）支出が価値をつくりだすとみなされるべきである。

なお，この第一の意味の価値は，「価値規定」ではあっても，「商品の価値」といえるのかどうかということは，大きな理論的問題であるが，実はそれはマルクスの社会主義観，そして商業観と深くかかわっている。一方で，1917年以後の社会主義経済の経験，他方で現代資本主義経済のサービス化，ソフト化という現実の上になつと，価値というものについての考えを，現代化する必要がある。つまり，価値を無視した恣意的なえせ計画経済，交換・流通・商業の軽視といった問題点が次々と浮かびあがってくる。そして，単に物財だけではなく，社会的に必要な諸活動を重視し，その経済的意義をみとめ，拡張された意味での価値形成性を承認することが，いまや不可欠である。

また，(4)については，マルクスがここでの価値を認めているのか，いったいどういうことを考えているのか，ということが不明だが，この文章からは，流通過程で価値が生まれると言う思想が潜んでいるように見える。それはさておいても，本稿の流通労働も価値を生むとする立場からすれば，そこでの社会的必要労働時間の規定の仕方は，たしかに，明示しておくべき問題であるが，こ

ここでは省略に従うしかない。

つぎに、商業資本のもとでの商業労働について述べられている文章について、みてみよう。

p. 372. 「商人が b [可変資本] で買うものは、想定によれば、ただ、商業労働、つまりり資本流通の諸機能 $W-G$ および $G-W$ を媒介するために必要な労働でしかない。ところが、商業労働は、資本が商人資本として機能するために、資本が商品の貨幣への転化および貨幣の商品への転化を媒介するために、一般に必要な労働である。それは、価値を実現しはするが創造しはしない労働である。」

p. 377. 「産業資本にとっては流通費は空費として現れ、また実際にそうでもある。商人にとっては流通費は彼の利潤の源泉として現れ、この利潤は——一般的利潤率を前提すれば——流通費の大きさに比例する。それゆえ、このような流通費のために必要な出費は、商業資本にとっては生産的投下なのである。したがってまた、商業資本が買う商業労働も、商業資本にとっては直接に生産的なのである。」

ここでマルクスが、商業利潤の源泉について、いろいろ苦心しているのは、価値は物財にしか存在しないという考えにとらわれているからだ。価値とはなにかという根本問題である。また、一方で、「商業資本にとっては生産的投下」また「商業資本にとっては直接に生産的」というマルクスの言い方は、資本の価値増殖に役立つものが生産的という彼の立場をしめしている。

V ま と め

以上『資本論』第1, 2, 3巻におけるマルクスの商業、流通労働についての叙述を、その価値形成性の観点から検討してきたが、これをまとめると、次のようになろう。

本来の商業労働のまえに、まず運輸業（ここでは商品つまり貨物の輸送のこと、

旅客輸送はまた別に扱われねばならない）に投じられた労働について。マルクスは、運輸業を一つの独立の生産部門とみなしている。それで、ここで支出された労働は使用価値と価値を生産すると、規定している。なおまた注目すべきは、ここで生産された使用価値は、物財ではなくて、有用効果なのであるが、マルクスは価値論的にはそれを物財の使用価値と同様に扱っていることである。運輸業についてのマルクスのこのような規定は、完全に正しいと考えられる。

次に倉庫業（商品の保管にかかわる部門をこう呼んでおく）に投じられた労働について。

マルクスはこの労働について、社会の再生産過程を進めるのに必要不可欠のものとしてみなしているが、ここでは使用価値も価値も生産されず、これは社会的空費であって、直接的生産過程で生産された価値でまかなわれるものとしている。したがって、ここでは社会的価値は生産されないが、倉庫業資本家にとっての個別的価値は形成されるとしている。私は、価値は直接的生産過程でのみ生産されるものではなく、流通過程、さらには資本主義的生産の総過程においても、そこに社会的分業にもとづく労働が投入されるかぎり、生産されるという立場をとるものである。わかりやすくいえば、『資本論』第2巻で扱われている流通部面でも、第3巻で扱われている商業、信用の分野でも、社会的分業の一環として支出されるかぎり、その労働は価値を生み出すと考える。したがって、倉庫業に投じられた労働は、保管される商品の使用価値の維持と、価値の実現の準備という意味で、有用効果を生み出し、それは同時に価値を創出すると、考えるものである。

おしまいに、本来の商業労働つまり売買取引のための労働について。マルクスはこのような労働は価値を生産しないとみなしている。その理由は、大きくいえば、二つであろう。

一つは、価値は直接的生産過程で使用価値が生産された場合にのみつくり出されると、マルクスがみなしていたように思われることである。なお、彼が使用価値と考えていたものはなにかということであるが、もちろん、流通過程で運輸労働が有用効果を生み出す場合、マルクスはそれも使用価値の生産である

と考えているが、しかし彼の考えていた使用価値というのは、大体において物財である。

もう一つの、そして、もっとはっきりとマルクスが言明し、かつ強調している理由は、本来の商業労働は、価値の形態転化を媒介するに過ぎないということである。『資本論』第1巻では、価値の形態転化は等価交換なのだから、使用価値はともかく、そこから価値が生まれたり、増えたりすることはないという点を強調しているが、第2、3巻になると、価値の形態転化という点を彼が一貫して主張しつづけることの意味が、さらにひろく、ふかいところにあることが、だんだんはっきりしてくる。つまり、経済的社会構成体の交代として歴史を見るという彼の立場とかかわって、価値の形態転化というのは、商品生産社会に特徴的な現象であって、他の社会では必ずしも必要ではないと彼が考えていて、そのような立場から、商業労働は価値を生まないという主張が出てきたのではないだろうか。これは、例えば、彼が、商業労働を、商品生産社会に特徴的なものと彼が考えていた貨幣と同じカテゴリー、つまり純粋流通費あるいは商品生産一般の空費とみなしていたことから、考えられることである。

しかしながら、商業というものは、社会的分業の発達した社会では、売手と買手とを結びつけるもの、需要と供給とを媒介するもの、あるいはマルクスの言い方を使えば、社会的物質代謝を媒介するものであって、それをどう名付けるかはともかく、必要不可欠のものである。このような媒介によって、一定の有用効果つまり使用価値が生じ、かつ、そのために投じられた労働によって、価値がつくり出されると規定することは、けっして恣意的なものではなく、現代の経済社会の現実を素直に反映させた思想だと思うのである。

なお、商業労働というものは、価値を生産はしないが、価値を形成はするものであるとする理論的立場もありえよう。これは、例えば、マルクスの保管労働にたいする規定の仕方をいわば援用するものである。さらにいえば、それはサービス労働一般について、価値を生産しないが、形成するという理論的立場ともかかわってくるものであろう。けれども、そのような立場を取った場合には、社会的空費あるいは燃焼労働の類推などの問題が起こってきて、結局価値

とは社会的労働であって、物とは直接の関係はないという本稿の新しい理論的立場を一貫させないことになってしまう。やはりそのような立場はとらず、むしろマルクスの有用効果についての思想を手掛かりにして、この問題を展開すべきであろうと、考える。

しかしながら、これらの問題のくわしい検討と展開、そしてまた、先学諸家の諸説の検討は、他日に譲るほかはない。